日本のユーモア 2

古典・説話篇

織田正吉

日本のユーモア 2

古典・説話篇

織田正吉

筑摩書房

日本のユーモア　2
古典・説話篇

一九八七年六月三十日　初版第一刷発行

著者　織田正吉
発行者　関根栄郷
発行所　筑摩書房
〒101-91 東京都千代田区神田小川町2の8
電話(03)二九一—七六五一（営業部）
二九四—六七一一（編集部）

印刷所　明和印刷
製本所　積信堂

© Shōkichi Oda, 1987. Printed in Japan. ISBN 4-480-35602-9 C0392
乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

はじめに

I　王朝の笑い

1　竹取物語　2

物語のいできはじめの祖　五つの求婚滑稽譚　求婚譚の笑いの分析

『竹取物語』のしゃれ　滑稽人物としての竹取の翁

2　伊勢物語　12

『伊勢物語』の笑い　歌の意味を変える物語　われさへもなく

「東下り」の言語遊戯

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3 平中物語 22
業平と平中　失恋のパターン集　説話の中の平中　墨塗り説話の継承
4 土佐日記 31
屈折したユーモア　笑われ役の船君　『土佐日記』の言語遊戯
あやしくも歌めきて
5 落窪物語 38
老人の恋　好色老人の系譜　笑いの素材としての排泄
6 枕草子 45
うがちの精神　父・元輔と清少納言　関白道隆の猿楽言　ウイットの応酬　嘲笑される男性　笑いに満ちる『枕草子』
7 源氏物語 59

三人の滑稽人物　笑劇の継承　近江の君という女性

8　堤中納言物語　67

つややかな好色滑稽譚　「虫めづる姫君」　戯文「よしなしごと」

Ⅱ　ユーモアの成熟

1　今昔物語集　76

二種類の笑い　ヲコを笑う　ヲコなる人びと　徹底した嘲笑

可咲シキ物言ヒ　ウイットの賞揚

2　宇治拾遺物語　96

編纂者・大納言隆国　ユーモアの採集　オチの意識

3　古今著聞集　104

鎌倉時代の笑い　心はやき者　笑話形式の整備　露骨な艶笑譚

4 沙石集 115
笑いの多い仏教説話集　ユーモアの成熟　笑話に教訓を求める
教訓笑話の系譜　継承される『沙石集』の笑い
5 徒然草 128
価値観の転倒　生活者の知恵　シニカルな笑い

Ⅲ 哄笑とパロディーの時代

1 狂言 140
狂言の源流　古典に見る滑稽演技　田楽座と猿楽座　観阿弥・世阿弥父子　笑劇としての狂言　祝言性と笑い　哄笑による招福
動きの滑稽　像・動物の擬態　神・雷の卑小化　狂言の中の連歌・秀句　奸智と悪計　なぶり　台本の固定と様式化
2 御伽草子 170
ひろがる読者　『ものくさ太郎』　一寸法師とものくさ太郎　『福

富草紙』　『精進魚類物語』

3　笑話本　187

安楽庵策伝　お伽衆と笑話　『寒川入道筆記』　『戯言養気集』

『きのふはけふの物語』　『醒睡笑』

4　仮名草子　206

パロディーの時代　『仁勢物語』　『竹斎』

Ⅳ　人間喜劇

1　好色一代男　222

西鶴とその時代　『源氏物語』『伊勢物語』のパロディー　傑出したユーモア　年立ての錯記　道化の失敗

2　諸艶大鑑　233

遊里短篇小説集『諸艶大鑑』

3 西鶴諸国ばなし
説話の復活と採集　傘の御託宣　神鳴の病中　咄の影響

4 好色五人女 241
モデル小説　樽屋おせんの「喜劇」　極限状況の笑い

5 本朝二十不孝 248
ネガティブのネガティブ　親の死を待つ息子

6 日本永代蔵 253
致富と没落の物語　借家に住む分限者　銀への執着

7 世間胸算用 259
大晦日の生態　闇の夜の悪口　夜市のスケッチ　寺の大晦日

8 好色万金丹 268
西鶴以後の好色浮世草子　オチの意識

V 滑稽小説の展開

1 浮世親仁形気
江島其磧の気質物　堅い息子と好色老人　困った老人たち

2 当世下手談義 279
談義の小説化　諷刺と教訓

3 風流志道軒伝 285
戯作者・風来山人　諸外国の遍歴　『志道軒伝』と『ガリヴァー旅行記』

4 根南志具佐 294

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平賀ばりの戯文

5 放屁論 298

田沼時代と平賀源内　源内の飛翔と失意　自嘲の奇文　露悪と自嘲

Ⅵ 洒落本と黄表紙

1 聖遊廓 308

三聖の遊興　漢文学の流行と笑い

2 遊子方言 315

写実的な笑い

3 道中粋語録 319

岡場所の哀歓

4 傾城買四十八手 322
山東京伝の洒落本
5 田舎芝居 324
森島中良の野夫本　洒落本から滑稽本へ
6 金々先生栄花夢 328
大人の絵本・黄表紙
7 大悲千禄本 331
黄表紙の代表作
8 化物大江山 336
擬人化と構想移入
9 莫切自根金生木 339

価値の転倒

10 親敵討腹鞁 341
こじつけの方法

11 江戸生艶気樺焼 343
京伝の代表作　通人の戯画

12 文武二道万石通 348
松平定信の寛政改革　時事諷刺の黄表紙　『文武二道万石通』　寛政改革のちゃかし

13 鸚鵡返文武二道 355
痛烈な揶揄　定信を嘲笑する　出版取締りと笑いの喪失

14 心学早染草 361

山東京伝の転向　黄表紙の終焉

Ⅶ 爆笑の文芸

1 東海道中膝栗毛 368

時代を超える笑いの文芸　愚行と不道徳の百科全書　性と排泄の笑い　先行作の利用と加工　言葉の笑い　狂歌咄の系譜

2 浮世風呂 381

咄の会の盛行　言葉癖の精密描写　庶民群像のスケッチ　子連れの父　喧嘩口論の描写　老婆の会話　学者気質への皮肉　人間内面の透視

3 花暦八笑人 402

茶番の流行　花見の趣向　虚構と現実の混同　プラクティカル・ジョーク　『八笑人』以後

笑う者と笑われる者——あとがきに代えて——　415
テキストおよび主要参考文献　420

はじめに

日本文学の歴史を笑いあるいはユーモアの面から眺めてみようと思うのである。便宜上、『日本のユーモア　1　詩歌篇』と本書古典説話篇を分冊したが、もともとおなじ一冊の中に並行して述べるべきものである。表題の「ユーモア」の語義も詩歌篇と同様、笑いとほぼおなじ意味に用いている。

日本の古典の中の笑いやユーモアについて述べる場合、『古事記』にあるアメノウズメの説話、『播磨風土記』にあるオホナムチとスクナヒコナの説話などから書き起こすのがよいかと思われるが、それは周知のこととして、本文中の関連する部分で触れることとし、物語文学の最初とされる『竹取物語』から始めることにした。時代の下限は詩歌篇と同じように近世である。

一般教養としての日本文学史、教壇で講じられる古典の通史では、笑いの部分の多くが切り捨てられる。すくなくとも、私が受けた講義はそうであった。日本の古典文学は風雅なものであるが同時に退屈なものでもあるという通念があるとすれば、それは多分に笑いの部分を切り捨てた結果であると思われる。小林秀雄は悲劇性の濃い『平家物語』にも笑いがあることを指摘した。『平家物語』にかぎらず、濃淡の差こそあれ、日本の文学はどの時代にもかならず笑いの要素を持っていたということは、もっと認識されてよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com